

# 中央大学保健体育研究所 シンポジウム

テーマ：2020東京オリンピック・  
パラリンピックを目指して

日 時：2016年1月18日(月) 16:42~18:46

場 所：多摩キャンパス文学部棟 3552教室

## プ ロ グ ラ ム

司 会：森 正 明 (文学部教授・保健体育研究所研究員)

講 師：クーベルタンの思想と2020年東京大会の大学連携  
和 田 浩 一 氏 (フェリス女学院大学)

2020年東京大会とオリンピック：平和運動をどうするのか？  
舛 本 直 文 氏 (首都大学東京)

オリンピック・パラリンピックが目指しているのは、  
スポーツ・フォー・オール社会  
師 岡 文 男 氏 (上智大学)

**司会（森）** それでは時間になりましたので、「2020東京オリンピック・パラリンピックを目指して」というシンポジウムを始めさせていただきます。きょうは3人の先生に来ていただきました。1人20分程度のプレゼンをしていただいて、できるだけフロアの方とディスカッションをしていただければ良いと思っております。

本当は終わりましたら簡単な懇親会を予定していましたが、残念ながら大雪のために中止させていただきました。その分、6時半ぐらいまで少し延長させていただきます。

私は、きょう司会をさせていただきます文学部の森と申します。

2014年から、大学連携等の会議が始まりましたので、今のところ全ての会合に出させていただきます。今後はぜひ中央大学でも、連携フォーラムを開催したいと考えています。

2014年から保健体育研究所で「2020オリンピック・パラリンピック研究班」をつくりましたので、そこの講演予算と企画委員会予算を使わせて頂き、研究所主催ということで公開シンポジウムを開催させていただきます。

所長は、所用で出席できませんのでご挨拶は失礼させていただくことになりました。

それでは、順に3人の先生をご紹介します。

皆さんから向かって右が、フェリス女学院大学の和田浩一先生です。

**和田** よろしくお願ひします。

**司会** 和田先生は、若い頃からクーベルタン研究をされておりまして、先ほど少し紹介させていただきました連携フォーラムでも、関東地区のみならず他県のフォーラムでもクーベルタンにまつわる話をされている方です。

私はAKBの追っかけならぬ、和田浩一先生の追っかけをしまして、今のところ奈良県より遠くまでは追っかけていないのですが、奈良女子大でもご一緒しておりましたので、機会あるごとにぜひ中大にも来てくださいとお願ひをし続け、今日は3限文学部の授業でもお話をさせていただきました。

きょうのトップバッターということでよろしくお願ひします。

それから、お2人目は、一番左になります首都大学東京の舛本先生です。

**舛本** 舛本です。よろしくお願ひします。

**司会** 舛本先生には、5年以上前にもオリンピックに関連する博士号を取得された後に、本日も同様保健体育研究所の講演会に一度来ていただきました。個人的には都立大の時代からご指導をいただいております。去年、東京オリンピックの50周年ということで、逆に協力依頼を受けて少しお手伝いができる機会があり、私とフェンシングの千田選手（オリンピックを1人一緒に）と共に、1964年開会式を記念したシンポジウムに出させていただきます。

最近、舛本先生は自分のメールにオリンピック博士よりも「オリンピズムの伝道師」という用語を書かれていますので、私は小学校以来、(自称)オリンピック博士とやってきましたので、今後もオリンピック博士といわせていただきたいと思っています。

今回は、特に「オリンピックと平和」をテーマにしてお話をさせていただくことになっております。

3番目、ラストを飾っていただくのが、上智大学の師岡先生です。

**師岡** こんにちは。よろしく申し上げます。

**司会** 師岡先生は、大変饒舌な方で、多様な活動、多様な視点からいろんな活躍をされています。若い方はあまりご存じないと思うのですが、「ワールドゲームズ」という、オリンピック種目になる前の立派な大会があって、その委員もされています。例えば7人制のラグビーも、ワールドゲームズの中でずっと競技として行っていたものがオリンピック種目に取り上げられたという流れになっています。

それから、今日も少しご紹介がありますが、上智大学の一つのプロジェクトとして教員、職員(教職共同)で2019年のラグビーの世界カップ、2020年オリンピック・パラリンピックについても多様な角度から取り組みをされているということなので、その辺についても少しご紹介をして頂くことになっています。

それでは、和田先生のほうから始めて頂きます。

# クーベルタンの思想と2020年東京大会の大学連携

和田 浩一

皆さん、改めましてこんにちは。フェリス女学院大学の和田といいます。

先ほどは3限目に、文学部で初めて授業をすることができました。非常にうれしいという理由も添えて説明したのですが、この中に先ほど会った方を何人か見つけることができ、とてもうれしく思います。

私以外の2人はすごくアグレッシブで、口だけではなくて（失礼ですが）行動力もすばらしい方です。私にはまだその行動力が備わっていないのですが一応、オリンピックをつくったクーベルタンという人の研究をしていますので、私から話を切り出して、その後の具体的な話は、お2人の先生方にお任せしたいと思います。

皆さんご存じのように、左側がクーベルタンという人です。オリンピックをつくった人です。

これは初めてご覧になる方もいるかもしれませんが、「オリンピック憲章」と呼ばれるオリンピックのルールブックです。このような目的でオリンピックが存在していますとか、このような手順で進めますとか、こういうことをしたら反則ですよというルールが書いてあるルールブックです。その冒頭に、こう書かれています。

オリンピック大会ではないんですけれども（オリンピック大会とは言っていません）、オリンピック・ムーブメントの目的は、オリンピズムというオリンピックの理念に基づいて世界の平和をつくることです。金メダルをたくさん取ることとか、金メダル、銀メダル、銅メダルの一番メダルの多い国が勝ちです、それを目指すゲームです、などという記述は一切ありません。まずここを押さえてください。

そして、オリンピック大会って何なのかというと、オリンピック大会は、波打って進行していくムーブメントの頂点に当たるのだと。つまり、4年に1回、こんなように頂点が来ると。その頂点の時がオリンピック大会だと書かれています。だから、オリンピック大会だけが目的ではないということをまずご理解ください。

次に、このクーベルタンという人がどのようにオリンピックをつくったのか、ごく単純に説明をします。

まず一つ目ですけれども、彼には幼少時代の「戦争の体験」がありました。我々、戦後生まれの者にとっては想像できないんですが、目の前で戦争が起きたということなのです。それから二つ目、我々が今見ているのは近代オリンピックですが、そのモデルとなった古代オリンピックへの関心が非常に高かった。これはクーベルタンだけではなく、その時代の関心も高かったという背景がありました。それから三つ目、パブリック・スクールに彼が注目したという事実があります。これらの三つが絡み合って近代オリンピックができたのではないかと理解しています。

まず、その戦争体験ですが先ほどの文学部はさすがでした。1870年、彼が7歳のときにどんな戦争がありましたかと聞くと、すぐに普仏戦争と言ってくれました。パリが戦場となった普仏戦争がありました。そしてその後、実はプロイセン側と和平交渉を進めた暫定政府とあくまでも徹底抗戦すべきだというフランスの派閥があって、この二つの派閥がフランス人同士なのに戦いました。一説によると3万人以上の方が亡くなったと言われています。これが彼の住んでいたパリでありました。我々の目の前で、人が人を危める。そして、傷つき亡くなっていく。このような姿をクーベルタンは、後に非常におぞましい姿だったと、悪夢のようにフランスを通り過ぎていったと書いています。

二つ目が、「古代オリンピックへの関心」でした。ここで我々が注目したいのは、古代ギリシャには三つの思想があり、その一つ目が「カロカガティア」といいます。これは、美にして善、美しいものは善いものであると。逆に言うと、善い人であるには美しくなければならないという思想です。

ですから、これは私が持っているフィギュアですが、ディスコボロスという有名な彫刻です。古代ギリシャの彫刻で、皆さん、筋肉の均整が非常にすばらしいと思いませんか。そしてこの筋肉だけではなくて、少しわかりづらいのですが表情ですね。これも、いわゆる揶揄して言われるスポーツばかりか頭が筋肉でできているタイプではなくて、非常に知性もあり品性もある。要するに、人間的に完成された神に近い姿がこの美しさだったという思想がありました。そういう存在に自分を高めるためにトレーニングする。トレーニング以外でも知的修行を積む。このような自分を高めようとする、そういう思想を近代オリンピックにもクーベルタンは持ち込んでいます。

二つ目、「エケケイリア」という思想がありました。これは簡単に言いますと、休戦協定です。古代オリンピックの期間中は戦争をしてはいけないというルールです。皆さんご存じのよ

うに、当時の古代ギリシャにはたくさんのポリスがありました。東京都とか神奈川県、私の育った石川県とか、そのポリスが戦争ばかりしていました。でも、オリンピックのときだけは戦争をしてはいけないというルールがあって、これはほぼ守られていたそうです。クーベルタンは、この平和的な思想を近代オリンピックに持ち込んでいるがゆえに平和の祭典と呼ばれています。これは次の舛本先生の話につながると思います。

それから三つ目、きょうは声を大にして言ってきました。実はスポーツだけではありません。古代ギリシャで大切にされたのは、先ほどのカロカガティアでも言いましたけれども、人間であるために文芸（文学や芸術）、これとスポーツ。昔の言葉で言うと身体運動。これを融合させるという考えです。

ですから、古代オリンピックにはスポーツの大会だけではなくて、ここにありますが、彫刻、音楽、詩、文学などの競技もありました。要するに、これらの二つのことが融合し合うことによって人間性を高めていくと。

来年2017年から始る、カルチュラル・オリンピアード—今年からですか、失礼しました。オリンピック大会の前から文化的イベントが始まっていきます。その一つの根拠となっているのが、このスポーツと文芸の融合ということです。

ですから、きょうは文学部で話をしましたが、文学部とも非常に関係があるということを強調しました。

三つ目は「パブリック・スクールへの注目」です。実はクーベルタンが高校を卒業して読んだ本、『トム・ブラウンの学校生活』という、当時のパブリック・スクールの卒業生が、自分の過ごしたパブリック・スクールの様子を描いた小説でした。これがフランス語にも翻訳されて、彼はこの本の虜になりました。

そこで二十歳のとき、イギリスに渡ってパブリック・スクールを実際に見に行きました。これはパブリック・スクールの学校のうちの一つです。何という学校かわかりますか。ここにH型の柱が立っていますが、ラグビーですね。これはラグビー校といいます。もちろんラグビー校だけではなくて十数校回ったわけです。特に何が大切かといいますと、ラグビー校に代表されるスポーツ活動です。このラグビー校、実はこのエリス少年という、ラグビーのルールをつくったと言われている人の銅像がありますが、要するにパブリック・スクールの中で生徒自身の自主的な活動としてのスポーツがあったということです。

クーベルタンは、これを見に行こう感じました。当時、軍事的にも産業的にも、金融も強い、そして政治ももちろん強い。いろんな意味での世界のトップランナーだったイギリスを形づくっているのは、このパブリック・スクールの卒業生であると。単なるインテリではなく

て、苦しい場面でも耐え抜ける、そして人々を引きつける力を持った人材である。これをつくっているのがパブリック・スクールの教育であると。そして、その真ん中には自由がある。自主的な自治活動。当時のフランスは、どうも昔の日本と同じで鑄型にはめるような（クーベルタンは鑄型にはめ込む教育と言っていますけれども）、そういう教育だったそうです。型にはめる。そうじゃなくて、伸び伸びと自主的に、そのかわり責任をとらせる。このような教育があったと。そして、その中心にはラグビーに代表されるスポーツがある。クーベルタンはこう考えました。

そして、この三つが彼の頭の中で合わさって、戦争のない世の中へ、そして古代オリンピックをモデルにしたらいいのでないか、形としてはパブリック・スクールで行っていた近代的なスポーツがいいのでないかということがあってオリンピックに結びついていきました。

彼は、オリンピックを復興させる会議を開く際にこんなことを言いました。「気がかりの一つは、大学が動こうとしてくれなかったことである」。要するに、オリンピックを復興させようという声かけたけれども、大学は見向きもしてくれなかったと。「私はこの事業に（オリンピックに）古典的な性格を意味づけするため、大学の代表者たちが会議へ出席することを大いに当てにしていた」と。つまり、どうも我々はスポーツというと、何か筋肉活動ばかり行っていると揶揄されるけれども、そうではなくて、古典的であると。つまり、後々の世の中にも意味ある活動にしていきたいと。だからこそ大学の力が必要なのだ、それなのに大学は何も協力してくれないと。そう嘆いていたわけです。

そこでいろいろ考えたあげく、実はそのオリンピックを復興させる会議をこのパリ大学という大学を象徴するような場所で行いました。これはソルボンヌという、皆さん聞いたことがあるかもしれませんが、セヌ川のすぐ近くの校舎の大講堂です。これ、ピュヴィス・ド・シャヴァンヌという有名な人の壁画なのですが、こういう芸術性にあふれた、それから大学という、クラシックという雰囲気にあふれた場所を選んで、このオリンピックの復興を決めました。

そしてこれが第1回となったアテネ大会の写真ですが、こういうように実際の大会を運営するに至ったわけです。ところが、彼はその直後にこのようなことを言っています。1896年の第1回オリンピック大会、「アテネでは、いわば歴史の衣をまとって仕事を運んだだけだった」。古代オリンピックがあった国だという、それだけだったと。「会議も講演もなければ、精神的あるいは教育的なものへ目を向けることも全くなかった」。逆に言えば、彼はオリンピックの期間中、こういう会議や講演をしてほしかった。そして観衆の視線を、精神的あるいは教育的なものへ向けたかった、でも、ままならなかった。だから、「アテネ大会の直後に私が向かったのは、自分がとった行動に（つまりオリンピックに）知的かつ哲学的な性格を呼び戻し、IOC（国

際オリンピック委員会)にスポーツ団体以上の役割があることを直ちに示すことだった」。つまり、単なるスポーツの統括団体じゃない、スポーツの総合大会じゃないのですよということを、彼は第1回大会の直後にすぐ実施しなくてはいけないという危機感にさいなまれたわけです。

そこで彼は、この会議を開きました。これはオリンピック大会のスポーツイベントではありませんが、「オリンピック・ kongress」という名前がついています。1896年の第1回アテネ大会の翌年ですね。ル・アーヴルというフランスの港町で、身体訓練(つまり体育ですね)、保健衛生、教育学、歴史。何か一見、親和性のないような歴史とか入ってきていますが、こういう、一見相入れられないような分野の人々を一緒に会議しましょうというようにいざなったわけです。

それが1905年には、スポーツと体育にテーマを絞りましたけれども、いろんな問題点を考える。そして、おもしろいのが1906年です。芸術と文学とスポーツの融合。古代オリンピックにもありました、スポーツと文芸の融合、これをまさしく体現した会議を開いたわけです。

そして1913年のスポーツ心理学とスポーツ生理学。このスポーツ心理学というのは、スポーツをやっている人がどう感じるか、どのような思いに至るかを言葉で表現するという、今の我々からすると非常に文学的な心理学です。今の実験心理学とか、そういう心理学ではありません。そして1925年には、このオリンピックを教育学にまで高めていきたいというテーマでkongressを開きました。

このkongressは何なのか。彼はこのように説明しています。「新しいオリンピズム」。一番最初のスライドで見せましたオリンピックのルールブックには、オリンピズムという理念に基づいて世界の平和をつくっていかうという活動なのだ。この「オリンピズム、すなわち身体的、知的、道徳的、そして審美的なすべての教育学をつくり出す活動」なのだ。これがオリンピック・ムーブメントの柱なのだと書いています。

きょうは文学部で話をしましたので、特にこの芸術と文学。一見、スポーツから距離がある方たちとも、実はオリンピックが、そうした方たちの協力も得ないとクーベルタンが理想とした本当のオリンピックにならないということを強調しておきたいと思います。

クーベルタンはどんな人だったのか。彼の生涯について公刊された本を見てみると、ほとんど教育に関するものです。そして、それは体育だけではなくて、知育の問題、徳育の問題、そして芸術の問題、これらを議論して何とか新しい教育をつくれなかなと模索していました。

先ほどパブリック・スクールと言いましたが、彼は、若いときはイギリス的な教育をフランスに持ち込もうとしました。要するに、当時、今で言うスポーツクラブの活動がなかったのです。体育も自由なスポーツ活動ではなかった。簡単に言うと、兵隊さんのための体操ですね。そこに新しいスポーツを入れたかった。そういう活動をしました。



そして次に向かったのは、国際社会に目を向けてオリンピックを復興させることです。フランスだけではなくて、世界でこのような活動をしていけたらいいなと。そしてオリンピックのIOC会長をしました。国際オリンピック委員会の会長を辞任した後は、人民・民衆に目を向けます。オリンピックはどうしても若い人が中心ですので、この人民・民衆というのは老若男女、それから当時の、特に労働者。高等教育に行けなかった人、中等教育にも行けなかった人などの教育をしっかり行っていきましょうと。そこでスポーツも大衆化していきましょうという活動に打って出ます。

ですから、我々はクーベルタンと言うと、どうしてもオリンピックの復興者と理解していますが、彼の人生全部、全体を見た場合、教育を変えて、そして世界の平和を構築する。逆に言うと、世界の平和を構築するため、何とか教育を変えられないかということ考えた人でした。オリンピックはあくまでもその中心にありましたが、すべての活動ではなかったということです。

では、平和につながらない教育、戦争ばかり起こす教育はどこに問題があるのかと彼は考えました。最近、このように考えるようになりました。「人類だれもが無知を認識せずに、自己に満足しながら自らの論理に基づいて突き進んできた」と。これは彼の時代の教育の現状を、彼自身の言葉で要約したものです。つまり、もう自分のことしか考えない、自分がしている勉強しかしない、自分の研究しかしない、それがだめなのではないかと。つまり、この無知の状態です。これを克服しようとするのが、彼のテーマではなかったのかと考えています。これは1929年にオリンピックの会長をやめた後に述べた言葉ですが—それはちょっと置いておいて、なぜ無知がだめかという理論です。

左側を見てください。これはピッケル片手に険しい山を登っている姿です。このように登ると周りが見えません。周りを見る余裕がない。どうしても19世紀の前半の自然科学や人文科学も含めて学問が進化していく、深まっていきますます自分の道しか見えなくなる。それがこの戦争につながると。ほかの自分の枠の外が見えなくなるから戦争につながると彼は考えたのです。そうではなくて、新しい教育学は、もう面倒くさいことはやらずに飛行機に乗って上から全体を見るべきだと。この全体を俯瞰する力。要するに、自分のことばかりではなく、自分の行っていることがどういう山のどういう部分に位置づいているのか、それを飛行機に乗って見ていきましょうと。こういう教育学を何とかつけれないかというのが彼の課題だったようです。

そして、彼がオリンピックの会長をやめた後にまとめたものによると、上から飛行機で教育学全体を見るためには一般教養がとても大事だと。まず大事なのは全ての人が学べること。先ほど労働者と言いました。当時、高等教育に行く人は1%もない時代です。そういう時代に

みんなが学べるようになることが大事だと。今、みんなは二十歳前後ですけれども、その学生時代だけではなくて、いつまでも学び続ける、これが大事だと。

それから二つ目は、専門家教育です。これは特に中学や高校ではだめだと。大学に入って専門の教育に行くにしても、常に周りの景色を見ながらやっていくような、そういう教育学でなければいけない。そして地球上の人々が共通の教養、これを学ぶべきではないかと言って、天文学、地質学、歴史学、生物学、数学、美学、哲学、経済学、法学、民俗学と言語学という、10の学ぶべき領域を設定しました。私はこの10の領域が現代にマッチしているとは思いませんが、当時、彼は真剣にこのようなことを考えました。こういうことを世界のみみんなが学べばお互いにコミュニケーションをとれる基盤ができるのではないかということです。

さっき無知と言いましたが、これはオリンピックをつくったときの言葉です。「この（他人・他国への）無知は人々に憎しみを抱かせ、誤解を積み重ねさせ、さらにはさまざまな出来事を戦争という野蛮な進路へと情け容赦なく突き飛ばします」。つまり、無知が戦争につながるということを言っています。「しかし、このような無知は、オリンピックで若者たちが会うことによって、徐々に消え去っていくでしょう。人々は互いにかかわり合いながら生きているのです」と、オリンピックの制度をつくった直後に言っています。そして続けて、「スタジアムにあらわれる健全な民主主義、賢明かつ平和を愛する国際主義は、名誉と無私への崇拜をその場で支えることでしょう。こうした崇拜の念に助けられて、競技スポーツは筋肉を鍛えるという務めだけではなく、道徳心の改善や社会平和として行動することができるでしょう」と、見てください。1894年です。オリンピックをつくった直後の言葉です。

それから、これは1896年、第1回アテネ大会の直後の言葉です。「オリンピックは恐らく全世界の平和を確保する、間接的にはあるが有力な一要因となるだろう。戦争が起こるのは、国々が互いに相手を誤解するからである。異なった民族同士を切り離している諸々の偏見を乗り越えてしまうまで、私たちは平和を手にすることはできない」。

つまり、相手を誤解するということは相手のことを知らないということですよね。無知のまままで過ごしてしまう。これがオリンピックの間接的な平和への貢献となるだろうという話です。

オリビズムというのは、非常に耳慣れない、聞き慣れない言葉ですよね。これをクーベルタンの記述から非常にごく単純化すると、大事なことは、体育とか知育、徳育、芸術、これらすべてにかかわることを見直して戦争のない世の中をつくっていく。戦争のない世の中をつくるための教育学のあり方をすべての視点から考えると。

ところが、今、オリンピックというと、我々はこんなイメージがありませんか。体育のことばかり。しかも、マスコミで取り上げられるのは技術的なことばかりです。クーベルタンの思

想をどう形にしていくのかという話題は全然出ずに、何かスキャンダラスなことばかりが話題になっていますが、ここは大学ですので、ジャーナリストティックに問い直すということも大事ですけれども、クーベルタンの理念、オリンピックの理念に立つと、どう考えなければいけないのか。こういう立場で物を考えることが重要になってくると思います。

クーベルタンはこうも言っています。「オリンピズムは、排他的にこれを独占しようとする一つの民族のものでも、一つの時代のものでもない」と。つまり、一つの民族、ヨーロッパ人のものではないよ、アメリカ人のものでもないよと。だから、日本人も考えていいのです。それから、一つの時代のものでもない。クーベルタンが生きた、明治、大正、昭和の前期の時代のものでもない。今、21世紀ですから、21世紀のものでもある。

クーベルタンの自分の枠の中ではとても想像が付きません。日本人の考える、アジアの考えるオリンピズム。それから、新しい時代が考えるオリンピズムというのは想像がつかない。だからこそ、これを想像していくことがオリンピック・ムーブメントで大切なことであり、実は、こういう先ほど説明したような新しい教育学、21世紀にふさわしい教育学を考える一番大事な場所というのは大学なのではないかと現在考えています。そういうふうを考えていくことが、戦争につながる無知の克服につながるのではないかと理解をしています。

これで、私の話は終わりたいと思います。

どうもご清聴ありがとうございました。

# 2020年東京大会とオリンピック：平和運動をどうするのか

## 舛本直文

皆さん、こんにちは。

これは首都大学の宣伝ですね。ちょっとテンプレートを使わせていただいています。

先ほどもちょっと森先生からご紹介をいただきましたが、「オリンピックの伝道師」というふうに名乗るようにしております。なぜかといいますと、今、和田先生がお話ししていただいたオリンピックという言葉は、実は皆さんが得意の検索をかけても、広辞苑に出てきません。明解にも出てきません。辞書にも載っていない言葉なのです。まだ新しい、普及していない。そういう意味で、皆さんもぜひ日頃からたくさん使っていて、広辞苑に何とか載せたいという思いがありますので、それも含めて伝道師でいきたいと思っております。

今日いただいたテーマは、オリンピックの平和という側面。和田先生がかなり本質的なお話をされましたのでご存じだと思いますが、2020年に向けてどうやっていくのかということも含め一緒に考えていきたいという思いでお話をさせていただきます。

オリンピックは平和の祭典と言われますが、どうしてそう呼ばれるのでしょうか。ほかのこのような競技とはどこが違うのでしょうか。もし違うとしたら、どんな平和イベントをしているのでしょうか。クーベルタンはクーベルタンの思いがありましたが、今のオリンピックはどんなことをしているのか。あるいは今度の2020年に向けてどうしたらいいのか。ここはとても重要だと考えています。

平和というのは国連です。これが中心的に活動しているのは皆さんご存じだと思います。オリンピックは平和と関係なくてもいいのでないかと思われるかもしれませんが、2020年のエンブレムも話題になっていますが、こういったようなものはシンボルマークと呼んだりしますが、象徴的に何かを伝えるわけです。五大陸を地球儀が—これはオリーブの葉っぱです。オリーブは豊穡とか平和の象徴です。こういうもので包んでいる。意味があるわけです。

70周年記念で国連もいろんなことを行いましたが、特に平和に向けて中心的に活動している

ところですが、なかなか力を発揮できないということもありますが、実はこのオリンピックのシンボルマークと呼ばれるものも、そういう象徴的な意味を持っています。

それで、今すぐに話題になるのが、これがお金です。世界最高のブランドです。トヨタはこれを使うために、10年間で1,000億円を払っています。すごいでしょ。年間100億払って、世界のTOPスポンサーというものになります。「TOP」というのは、実は最高という意味ではありません。頭文字をとって、The Olympic Partnerの略です。実は2014年に100年目になりますが、1914年、パリ会議のときにクーベルタンがこれを考えて公表しています。旗は白です。それでこの5色の計6色は、当時の世界の国旗の色を全部網羅することができたということですね。輪は五大大陸をあらわす。世界中からみんなが集まってきて、連帯や団結をあらわす。すなわち世界平和を志向したということ、この五つの輪と色であらわしているということです。誤解は、大陸の色とか肌の色、人種の色、あるいは5元素なんていう言い方もしたりしますが、肌の色が緑ですとちょっと厄介です。カメレオンとかピッコロ大魔王ぐらいしかいませんから、これでは少し困る。大陸の色にしまうと、暗黒大陸はどこだというようなことになってしまいます。だから皆さんも誤解しないように、世界の国旗の色をすべて網羅するという事です。語呂合わせで、青、黄、黒、緑、赤と左からこういう順番で覚えられるといいと思います。これはオリンピック憲章にも定めていますし、クーベルタン自身も、これを考えたときにはこういったことを書いています。

ただし、彼のお父さんは有名な画家だった。ですから、小さい頃から絵の素養がありました。そういう意味で、青、黄、緑、赤は補色です。全部色を混ぜ合わせると黒になります。それで真ん中に持ってきている。どうも美学的素養、美術的素養があったということが、この配置からうかがえるわけです。彼自身はそのことは書いていないようですが、どうもそういう配置をしたと私は思っております。

先ほど紹介があったオリンピック憲章は、根本原則にオリンピズムが云々と難しく書いてあります。この文章を読んですぐに、「こういうことか」とわかる人は、天才だと思います。

そして、「オリンピズムの目標は、スポーツを人類の調和のとれた発達に（これは教育です）役立てることにあり、その目的は、人間の尊厳保持に重きを置く平和な社会を推進することにある」。目標は、やはりバランスのとれた人間づくり、そして世界平和を目指すということが根本原則にうたわれています。

オリンピズムには3本柱があるというふうにご理解ください。最初にクーベルタンは、先ほど話がありましたように「スポーツ」と「芸術文化」、この2本で人間形成を考えた。ところが、最近、「環境」というもう1本の柱が入ってきます。先ほども出た重要な概念「カロカガテ

イア」, 美にして善ですね。これはバランスのとれた人間ということで, 教育思想と言っていいでしょう。そして, そういう若者たちが4年に一度, 世界中から集まってフェアに競技して, お互い知り合っって異文化理解をし, 友情を育んでいけば平和な世界ができることに役立つだろうと。これが平和思想です。それはギリシャの「エケケイリア」から来ているということは, 先ほど和田先生のお話にもありました。

ですから, オリンピックは今でもこういった文化プログラムというものを必ず行います。4年間かけて行くものを, 文化オリンピックと呼びます。オリンピック憲章にはこう書いてあります。選手村が開村した一週間前から閉村する一週間後まで文化プログラムを行わなければいけないと, 憲章には実はこう書いてあります。そうすると, その文化プログラムは一体だれのために行うのかということ, 選手村にいる人たちを想定しているというのがわかると思います。

2020年はどんなことをするか興味津々だと思いますが, 私がちょっと今持っている関心では, 東京はすごいだらう, 日本はすごいだらうと, 日本の文化を一方的に発信するような構想がちょっと強過ぎるのではないかと。もっと異文化理解, お互いに強調し合うようなものがほしいと。昔は芸術競技をやっていましたが, 今は文化プログラムです。そして国連では, 「オリンピック休戦決議」というものを採択します。これはまた後でお話しします。

文化と平和というのは, やはりオリムピズムではとても重要な柱になります。環境についてはきょうあまりお話しできませんが, この文化プログラムやオリンピック休戦決議というものがあつたということが, ほかの世界選手権やワールドカップの競技とは大きく違うことだつたことを頭に置いてください。

オリムピズムが一つの考え方ですから, 哲学や理念と言ってもいいと思います。それは教育思想であり, 平和思想です。こういう考え方に基づいていろんな活動がされます。これをオリンピック・ムーブメントと言っています。

ムーブメントはどんなものがあるのだろうかと一つ考える参考としては, IOCのミッションとして, オリンピック憲章に16挙げてあります。その中の3番目に, 「オリンピック競技大会の定期的開催」と書いてあります。そのほかアンチ・ドーピングであつたり, 男女平等であつたり, スポーツ・フォア・オールであつたり, さまざまな活動をIOCはしているわけです。

ですから, オリムピズムとオリンピック・ムーブメントとオリンピック競技大会の関係を, きちんと整理して理解しておいていただきたいと思います。いろんな活動をするには必ずその根本的な考え方がある。それがオリムピズムだと。それは教育であり, 平和を目指すものだつたというふうにご理解ください。

オリンピック憲章には, ムーブメントのゴールということで, 教育, バランスのとれた若者,

そして平和でよりよい社会を構築することに寄与する。こう定められていますので、全体を理解しておいていただきたいと思います。

お手元の資料はボリュームがありますので、今のオリンピックの考え方のところだけは、伝道師としてしっかり理解して帰ってほしいと思います。

次は、平和運動はどんなことをしているかということです。聖火リレー、これも平和メッセージを出しますし、さっきお話しした休戦決議もありますし、休戦センターというものもついています。オリンピック教育で、オリンピック休戦についても理解してもらおうというプログラムもあります。

では、選手村ではどうしているか。国連が平和をかなり重視して活動していますから、IOCとどんなことを連携して行っているのかということをお話したいと思います。

では、聖火リレーからです。これは36年のベルリン大会から始まりました。カール・ディームという事務総長が考えました。当時の写真です。四つの歴史的な意味がありました。古代でたいまつ競走を行っていました。それを参考にしている。国を越えて協力していこうという教育的メッセージもあります。当時のデザイン等も含めて技術的なメッセージもあります。それから古代オリンピアの祭典はゼウスに捧げる大会でしたから、宗教的なメッセージ。火のプロメテウスもあります。

こういったような四つの意味が言われていますが、やはり重要なのは、リレーをして通過していく、いろんな国と協力して、連帯・友好・伝達・平和メッセージということです。残念ながら、今は開催国内だけの聖火リレーになっています。これについてはまた後でお話します。

ベルリンのときはこの上にたいまつがあるわけですが、こういったように（これはエンブレムですね）、オリンピアからバルカン半島をずっと北上していきます。そして11日、12夜かけて3,075キロメートルを3,075人でリレーしていきました。

ところが、ナチスはこれをラジオ中継したんですね。そうすると、中継する電信隊というのが必要です。この電信隊は軍隊ですから、全部つぶさに調べます。それが後々、バルカン侵攻をするときの重要な情報になった。それからトーチはステンレス製であったと。それは大砲の砲身になっていく。まあ、こういうような悲しい歴史がありました。

これは平和の鐘と呼ばれていますが、こういうもの、鷺の絵がありますので、ナチスのメッセージも五輪マークと一緒に描かれていることがわかります。

1964年、東京はどうだったか。これが公式報告書に載っている聖火リレーのルートです。オリンピアで採火して、アテネ、イスタンブール、バイルートと中東を通過してインド、そして東南アジアを通過して香港へ入って、それから台北ですね。それで、まだアメリカに占領されてい

た沖繩に入る。実線の部分は全部国外ルートになります。点線が国内ルートです。

では、東南アジアをなぜ通ったかということです。それは日本が太平洋戦争で迷惑をかけた国に謝罪するという意味もあったわけです。そして日本が戦争を捨てて新しい平和国家になったというメッセージを伝える。こういう大きな狙いがありました。平和国家を日本も発信する。謝罪。こういう国外ルートが選ばれたということも覚えておいてください。

そして大会の開会式は、最終聖火ランナーが坂井義則という人でした。早稲田の1年生。競走部は陸上部ですね。中距離ランナーです。オリンピック候補選手だったのですがオリンピックには出られませんでした。しかし最終聖火ランナーに選ばれました。彼は8月6日、原爆が広島に落とされた日、広島の近郊、三次という町で生まれています。8月6日が誕生日、それで選んだという意味があります。外国の新聞は、彼のことをアトミックボーイと呼んで報道したわけです。平和メッセージがあったということです。

一気に飛びます。2004年、グローバルトーチリレーと呼びますが、国際聖火リレーというのが行われました。これが初めて五大大陸を全部回りました。この写真は、稲沢市の中学生がオリンピックのまちを聖火リレーしている写真です。“Pass the Flame, Unite the World (聖火をつないで世界を一つに)”と、こういうメッセージで回りました。このときは東京に来ました。

ところが、2008年、北京で国際聖火リレーをやって五大大陸を回り、スローガンは“Light the Passion, Share the Dream”とあってなかなかいい標語でしたが、実は各地で妨害やテロが起きました。それは北京がまだ人権問題、あるいはチベット問題などさまざまな問題を抱えている中国にオリンピックを開催する資格はないと、大会自体をボイコットするのではなくて、聖火リレーの妨害に入ったということです。日本では長野に来て、ここでも大混乱がありました。

この写真はオリンピックでの妨害のシーンです。たまたま私も見に行っていましたので、この子がちょうどリレーをする前にフリー・チベット、チベット解放を叫ぶ人たちが妨害に入りました。

これは長野の到着式で、これは国境なき記者団ですね。こういうような人たちがごったになって集まって、十重二十重とこちらの部隊を取り囲んで守っているという、こういった大騒動が起きました。2,000人、留学生たちが集まったと言われています。

これでIOCは、国内限定ルートを推奨するようになってしまって、この後の2010年のバンクーバー、2012年のロンドン、2014年のソチ、この3大会は全部国内しか聖火リレーができなくなりました。五大大陸の連帯という理想を捨ててしまった。古代のオリンピックの祭典競技では、スpondフォロイという伝令が、今からオリンピックの祭典をやりますよ、これからエケケイリアというオリンピック休戦に入りますという伝令で走っていきました。3人がギリシャ全土に。そ



ういったおふれです。この機会をIOCは失うことになってしまった。

私は、個人的には2020年、東京は復活するような運動をしっかりとしてほしいと思います、今の国際情勢はなかなか難しい。このようなときだからこそ五大大陸を回る聖火リレーというものをもっと主張していいのかもしれない。

そのもとなるエケケイリア、オリンピック休戦です。当時のポリスの慢性的な戦争状態です。見物する人も、アスリートも参加することはできません、戦争で死んだら。祭典の2カ月前から終了後1カ月、約3カ月の間は休戦しましょうということでした。このオリンピアの祭典競技に参加するというのは、まさにギリシャ人としてのアイデンティティを確認するという重要な意味を持っていました。ゼウスの神に捧げられるのは、ヘレネスというギリシャの人たちだけだった。しかも見ることができるのも男性だけと。

こういう制度ですから、このアイデンティティを確認するという意味が、もし協定を破ったら参加できなくなるわけです。ですから、相当強い縛りがここにあった。絶対神ゼウス、それからギリシャ人としての証というものがあったので守られた。それでも協定を破る国が出たという残念なことがあります。クーベルタンは、これをすぐオリンピック復興時に取り入れたかったのですが実現しなかったという歴史です。

それでIOCがこれを復活してきます。これが1992年のバロセロナの大会のときに道を開くようになります。1993年になりますと、1994年のリレハンメル冬季大会の前に、初めて国連の総会でオリンピック休戦決議が採択されます。そのテーマは、Building a peaceful and better world through sport and the Olympic ideal、ちょっと長い決議になります。

長野も含めて、夏冬大会すべての大会の前年の10月か11月の国連総会でオリンピック休戦が採択されています。今年はリオですから、昨年10月26日に国連総会でリオ大会のためのオリンピック休戦決議が採択されています。残念ながら、日本のメディアはこれを報道していません。こういった休戦というようなところに関心がない。新国立とかエンブレムとかにはかなり関心があるようですが。

最近の休戦決議はこういった、ロンドン、ソチ、全部あります。オリンピックの開会式の1週間前からパラリンピック終了後の1週間、この期間を休戦にしましょうということです。古代オリンピアでは3カ月間でしたが、それは旅をする人が長くかかるわけです。船旅もかかるし、陸地も長い時間をかけて旅する。今、これだけ短くなっています、トータル2カ月ぐらいになると思います。しかし、1回も守られたことがない。世界のどこかで戦争をしているからです。

最悪と言ってもいいのは、ソチのときにはオリンピックが終わってパラリンピックの間に、

クリミア半島併合ということが起きてしまいました。北京のときには開会式の当日、8月8日、グルジア紛争が起きています。プーチンは北京の開会式に参加しています。列席している中でグルジア紛争が起きてしまった。今、グルジアと言わないで、ジョージアと国の名前を呼びます。このように守られたことがないのが残念です。

休戦センターというのは、IOCはオリンピック休戦を推進するために、2000年にギリシャ政府とIOCが連帯してつくりました。最初に財団をつくり、Foundation。そこには元国連事務次長の明石康さんが入られています。今でもそうですね。そして、センターをつくって活動しています。事務所はこの3カ所にあるのですが、オリンピアは象徴的な事務所ですので、実際に建物も人も何もなくて、実質はアテネで活動しています。

活動は、こういったコミックを出したり教育したり、ウェブサイトで情報を発信したり、国際フォーラムを開催したり、ユースオリンピックが今度の2月にリレハンメルであります。そういうときにはこうしたブースを設置して、オリンピック休戦のアピールをします。

これはTシャツですが、ここに書かれている文字はこういったフレーズです。“If we can have peace for 16 days (開会式を除いた16日です), then maybe, just maybe, we can have it forever”。これはギリシャの首相になったパパンドレウさんが文部大臣だったときの、国連でスピーチした内容です。

次は、教育ではオリンピック教育というのがありますが、オリンピック休戦ではどんなプログラムをやっているのかという例です。これはロンドンのGet Setというオリンピック教育プログラムの名前ですが、そのシーンですね。ボードにピースサインをしている選手と生徒の写真です。

2011年9月21日。9月21日は国連の世界平和デーですが、そこでこういったOlympic Truce Programを開始しました。

文化プログラムと連携しても休戦活動を行っています。その例です。Peace One Dayとか、Peace CampとかInspired by peace, こういったものを行っています。ロンドンの事例です。ほとんどメディアは報道しません。

選手村でこういうことを始めたのは、実はアテネの2004年の大会からです。これはトリノの例ですが、ロゲ元会長がサインをしている。このMaybe we can have it foreverというのは、さっきのパパンドレウさんのメッセージです。それにサインをしている。これはちょっと余分ですが、トリノ市内に大きなスクリーンぐらいのブックがあって、休戦に賛同すればそこにだれでもサインできるというものです。

これはロンドンのときですが、アクリルの支柱を10本立ててだれでもサインができる。セレ

モニーでロゲ会長がサインしている写真です。今はそのうちの5本が、ローザンヌというところにIOCのオリンピック・ミュージアムがあるのですが、そこに5本飾られています。その中には、これは今どのように活用されているかという問題意識ですが、5本はどこに行ったのか、ほかの大会の休戦の壁はどこに行ったのかということです。

そして、これはついでです。上村春樹団長が「精力善用・自他共栄」と書いています。さくらジャパンというのは、女子ホッケーチームのサインですね。こういうものが見えたので、写真を撮ってきました。ソチでもこういったセレモニーが行われています。これもアクリルボードにサインしていますね。選手村ではこういった活動をしているというご紹介です。

次にIOCは国連とどんな連携をしているのかということで、一昨年、Olympic ideals are also United Nations ideals, こういう決議を国連は出しました。その前は、Olympic principle is United Nations principle, こういう形でつき合っていたのですが、こちらも新しく出しましたし、スポーツによる平和と開発、SDPと呼んでいます。Sports for Development and Peace, こういう活動にIOCは連携して行動しています。それから女性委員会と連携、そしてIOCは国連の永久オブザーバーとして（投票権はない）参加していますし、バッハ現会長は国連の特別大使に就任しています。

一昨年、4月6日、IOCと国連は「開発と平和のためのスポーツ国際デー」と定められました。日本では国連の広報センターがシンポジウムをしたりしてPRをしています。これもあまり知られていないんですが、4月6日は第1回のアテネ大会の開会式の日です。その日を記念しているんです。

一番新しい国連とIOCの連携ですね。国連は、アジェンダ2030、2030年までに今から15年間かけて17の目標を達成しましょうというのを昨年発表しました。そのうちの五つにIOCは協力してやりますよという、目標3、目標4、目標5、目標16、目標17。健康, equality, inclusion, ジェンダーの平等, 平和で包摂的な社会をつくろう, そしてグローバルな, みんなで連携してパートナーシップを確立して目標を達成していきましょうという。こういったところにIOCと国連は連携していこうと言っています。

ちょっと急ぎ足でお話ししてきました。最後に考えていただきたいのは、2020年はどうするのか。東京組織委員会が発信する平和活動というのは、まだほとんど見えていません。皆さんだったらどんなことをしたいとか、いろんな思いがあるでしょう。

こうした教育面ではどうするのか。4月から、実は東京の2,200校ぐらいの小中高特別支援学校を全部含めて、オリンピック・パラリンピックが始まります。ロンドンではGet Setという名前で行いました。先ほど少しお話ししました。ここに平和運動がどうかかわってくるのでしょ

うか。あるいは文化プログラムではどうするのでしょうか。日本の聖火リレーはどうするのでしょうか。

開会式でも平和メッセージを出します。ジョン・レノンのイメージをよく使ったりします。ハトも飛ばします。これは平和のメッセージです。どんな開会式にするのでしょうか。あるいは選手村では何をするのでしょうかというようなことが気になります。

そして、こういったものが後々もレガシーとして日本の平和希求の活動として続いていくのでしょうか。これはレガシー化していきたいと思っています。

この後の、一体、平和とは何かということはお手元の資料を見ていただいて、ただ戦争がないだけではダメなのだと。平和とは人間の基本的な必要がすべて満たされた社会の状態ということ。日本の基本的人権とは、生存・福祉・アイデンティティ・自由。人間が人間として生きていくために最低限必要なもの、こういうものをまさにヒューマン・レガシーとして保障していく。こういうことが重要なのではないのでしょうか。

あとは大学におけるオリンピックと平和運動をどのように展開していったらいいのかということも含めて、ぜひ皆さんと一緒に考えていきたいと思います。

ご清聴、どうもありがとうございました。

# オリンピック・パラリンピックが目指しているのは、 スポーツ・フォー・オール社会

師 岡 文 男

お2人とも20分は守っていただけていないので大変時間が少なくなって、6時半まで使えるという話でしたので、少し早口で話させていただきます。

まず皆さん、大変ラッキーなときに生まれました。私もそうですが、1964年の東京オリンピックは小学校5年生、10歳で経験しました。実はこの1964年の年まで、日本人というのはパスポートをもらえませんでした。一般人は海外に行くということができなかった。戦争が終わって19年目です。まさにもう日本中が焼け野原になってしまって、19年で立ち上がって取り組んだのが東京オリンピックです。1ドル360円ですし、経済力もまだない。そんなときに海外に遊びに行って金を使ってもらっちゃ困るということで、外交とか商用とか、いわゆるちゃんとした目的があって国が許可しない限り、パスポートは出してもらえなかった。だから当然、海外に行っているような情報を得たり、今みたいにインターネットもないので、いろんな文化交流をすることも大変制限があった時代です。

そのときに東京オリンピックがありました。参加国数、93カ国。私は小学校5年生でしたけれども本当に胸が高鳴って、雑誌についていた付録ですべての国の国旗を覚え、名前を覚え、それが何か今考えると海外というところに目を見開くチャンスでした。その10年後、20歳になったときに学生で、まだ1ドル360円でしたが絶対に海外に行きたいと言って、アメリカに行ってホームステイで20軒回るツアーに参加しましたが、いろんな意味で海外というものに興味を持って。人というのは会って話をして、そこで一緒に同じ御飯を食べたり同じ空気を吸ったり何かを一緒にしてみても、初めて文化の違いというのがわかっていく。日本は移民問題に対しては、何となく離れていますが、ヨーロッパで起きていることに対して、大変なことが起きていると思ながらも何か人ごとだと思っている。そういう意味ではグローバル化というのまだまだだど感じています。

そういう意味で、今度の2020年のオリンピックというのはすごく意味がある。私は第三の開国と呼んでいます。第一の開国は、ペリーが来て国を開いた。第二の開国は、1964年の東京オリンピックで、あどきに日本国民がみんな海外というところにもものすごい関心を持った。ホスト、ホステスとしてそういう人たちをどうやって迎え入れるかと頑張ったことによって、今の新幹線もそうですし、皆さん、PASMOなどを使いますが、あのオンラインシステムは、あどきの時間掲示を、同時にコンピュータで瞬時にいろんなところへ届けるといふのをIBMの社員が頑張った行った成果です。ポリバケツもそのときできていますし。

きょう当時のことを書いた著者がお見えになっていまして、64年のオリンピックの当時の日本のことを書いた本がたくさん出版されています。それを読ませてもらうと、日本人はその当時まですごくマナーが悪かった。時間には不正確で、平気で唾を吐いていたし、列には並ばない。北京オリンピックのときにみんなで並びましょうというので一生懸命に中華人民共和国が取り組みましたが、それに似たようなことが実は日本でもあって、ステテコで平気でまちを歩いていた。これは国際的に笑われるといふ国際マナーというものが定着したのもそのときだといふことです。こうしたことが、いろんな本に書かれています。

皆さんが今ファミレスで安く御飯を食べられるのも、冷凍食品だとかレトルト食品というのが選手村でいろんな国の料理を出す方法として考え出された。あどき、実はみんなボランティアを行っています。IBMの社員もボランティアで行った。それからホテルのコックさんたちも、みんな選手村にボランティアで行ってお金をもらわず、そこで世界の選手のために料理をつくったことが、実は今の日本の食文化。かなり国際的ですよ。一週間、皆さんの食生活を見ても、こんなにいろんな国の料理を食べている国はほかにない。これだけ国際化が進んだのも、実はそのときのおかげだと思います。

そういう意味では、和田先生、舛本先生からオリンピックの意味を聞いて、ああ、そんなに深くて、そんなに幅広いのかといふのを皆さんも実感されたと思いますが、何がすごいかといふと、世界中の人が集まる世界的なメガイベントであるといふことです。200カ国です、ロンドンのとき、それを上回る国と地域の人が同時に東京で一堂に会している。これは、国連の総会でもそんなことはありません。実は、国連の加盟国以上が来ているのがオリンピックだけです。皆さんもロンドンオリンピックの開会式をご覧になって、こんな名前の国は知らないよ、どこにあるんだ、と思った人がいると思いますが、それぞれに国があって人がいて文化があって、同じこの地球という中に暮らしているわけですよ。そういうことを目の当たりにして実感できるのが、実はオリンピックのすごいところです。

先ほど申し上げたように、これから本当に日本の皆さんの時代の課題は、もっともっとグロ

ーバル化をしていって世界とどのように協調しながら一緒に生きていくかということを考えるときに、環境問題、水も食料も含め、無知が戦争を引き起こすという先ほどの指摘が印象深く受けとめました。まさにいろいろな人たち、いろいろな国のことを知っておくというのが、これからの日本、皆さんがこれから生きていくためにもすごく大事なことだなというふうに思います。

2番目が、共通の思い出づくりです。私の世代は、あの東京オリンピックのとき、こうだったよねと。今でもあのときに—皆さん知らないでしょうけれども、ジャボチンスキーとかチャスラフスカとか。そのとき活躍した選手の名前を言えて、その情景が浮かんでくる。今、多様な文化の中でインターネットが進んでいても、それだけ皆さんが個性的になっていても、共通の思い出づくりというのは意外にできるようできていない。でも、このオリンピック・パラリンピックが好むと好まざるとにかかわらず毎日のように報道され、いろんなところで感動させてもらって、同じ空気を吸っていた人たちの共通の思い出になっていくというのが、一つのアイデンティティづくりになる。

恐らく2020年、水素自動車か電気自動車か、石油を使わない車が街中を走り、23言語以上に対応する時代になっているかもしれない。もうできていますが、成田空港でメガホンを使って日本語でしゃべると中国語や韓国語、英語に全部翻訳される。そういうシステムができていて、言葉の壁を乗り越えていろんな交流ができていくような、そんなテクノロジーも進むと思います。新幹線も、国立競技場も、国家予算としてはとってでもできるようなものではなかったけれども、とにかくやりましょうということでそのときの国鉄総裁が、まず試験的な実験をやってくださいというところから予算をとって、日本としては大変なものすごいお金をかけて取り組み、実は開会式の一週間前にやっとできた。その技術がまた日本というものの技術を海外に納得してもらって一つのエビデンスになったわけです。

それから三つ目は、障がい者のスポーツ大会としてのパラリンピック。日本に来る前にローマで障がい者の国際大会が行われて、それが一応パラリンピックの第1回とされているのですが、パラリンピックという言葉を考えて実際に使うようになったのは64年の東京です。そういう意味では、また里帰りをしてくる。障がい者スポーツの発祥地というのはロンドンとされていて、前回のロンドンオリンピックのときには里帰りと言いましたが、パラリンピックという名前の大会としては、今度の2020年度の東京が里帰り。

やはり障がい者の大会といったときに皆さんいろんなイメージを持つと思うのですが、考えてみると、これは多様性の共生社会です。みんな一人一人、男も女も、力が強い、弱い、いろんな特徴を持ちながら、強い面と弱い面、いろんなものをみんなが持っていて、いろんな人間がいる。その中で一緒に生きていくという方法を考える。ユニバーサルとか、今アダプテッド

スポーツとかいろんな言い方をしますが、考えてみるとパラリンピックの競技は健常者と障がい者が一緒になって行うことができる競技です。

私は体育の教師なので、ゴールボールだとかシッティングバレーを普通の体育の授業でやると、男女差もなければ運動部と非運動部の学生たちの差も出てこないし、これは一緒になって盛り上がる。例えば車椅子バスケット、私たちが車椅子に乗ってバスケットをしなさいと言われてたって、すぐにできないです。そう考えたら、サッカーも手を使ってはいけない競技と考えれば、何か制限をしながらルールを使って一緒になって楽しめるものをつくっていく。そういうヒントもくれる。

今、パラリンピックになると、まずはまちをバリアフリーにしようという話がでてきますが、これは日本の高齢化社会のためにもなるし、いろんな特徴を持った人たちがいるのが社会なので、そこでみんながそれぞれ楽しく平和に幸せに暮らせるというのを考えるいいチャンスをもらっていると考えることもできます。

それから四つ目が、ちょっと極端なことを書きましたけれども、「オリンピック・パラリンピックが目指しているのは、スポーツ・フォー・オール社会」。私は体育の教師なので、スポーツに対する誤解というものを、一般人、特に日本人がしていることに対して、何とか変えたいとずっと思っていました。

私はバレーボールが専門で春高バレーの大会に出ていましたが、上智大学に赴任して一般体育でバレーボールをやると、その当時、選択制じゃなかったんで、もうバレーボールに触りたくもない、見たくもないというのが半分以上ありました。それで真ん中辺にレベルを合わせると両方欲求不満になるという。これを必修で行うのはつらいと思っていたときに、まちで本屋に行ったらフリスビーの本があった。犬が啜えて走るのではないかと思って開いてみると、これが世界競技だと書いてある。これもスポーツなのかと36年前ですが、それを始めたらスポーツを嫌いな子が目の色を変えてやり出した。運動部の子たちも最初は斜に構えていて、軽いスポーツみたいな顔をしていましたが、これはおもしろいと一緒になってやり出した。

つまり、意識の変革とかルールや道具、それを変化させると実はみんなが一緒にできるようなものになってくれることが理解できた。スポーツというものは、オリンピックの正式競技とか国体の正式競技というだけだと思っていたんですが、いや、そうではないということを、そのときに思い知らされました。

オリンピック、もちろんスポーツの競技の祭典ですが、さっきお2人からもお話があったように、それだけのものではないと同時に、スポーツの捉え方も実は私たちは間違っていたのではないかということを知った次第です。



少し小さな字ですが、スポーツの語源は、そもそもラテン語の *deportare*、「普段と違うところに心と身体を運ぶ」。気晴らしみたいな意味です。IOCの公認競技にチェスとブリッジが入っています。体を動かさないのになぜか、別に身体運動ではなくてもスポーツです。しかし、私のフライングディスクも実はその後普及に頑張る今、日本協会会長をやっていますが、去年の8月、IOCの公認競技になりました。まだアメリカンフットボールはなれていません。世界中にそれだけ広まっているという条件を果たしていないからです。

つまり、オリンピックという、いわゆる世界で最大の、またみんなの注目を集めるところの承認しているスポーツの中にチェスとかブリッジもある。マインドスポーツ、頭を使う。だからスポーツってものすごく広い。音楽が嫌いな人はだれもいないと思います。でも、ヘビメタが好きな人とクラシックが好きな人は同じところへは行きません。でも、同じ音を楽しんでいることに違いはない。

だから、スポーツのもともとの語源を考えればスポーツが嫌いな人がいるわけがないと思います。でも、日本という国にはスポーツが嫌いな人がいっぱいいます。その証拠に、成人になったらスポーツをしなくなる国民が圧倒的に多くて、政府が慌ててスポーツ基本法をつくり、今、成人人口の65%、3人に2人が週に一度はスポーツをする国にするというのを、オリンピック・パラリンピックのレガシーにする。そうしないと、医療費がどんどん上がってしまうからです。

しかし、好きではないものを人間がするわけがないですから。考え方、つまりスポーツは本来そうやって自分でつくってもいいものだと考えれば、ニュースポーツとなります。「スポーツ」は運動競技だけじゃなくて、「気晴らし」とか「暇つぶし」、「ふざける」という意味なんです。体育会系の人聞いたら「おれ、ふざけてないですよ。ばかにしないでください」と言うかもしれませんが、もともとはそういう気楽なところにあるのがスポーツという文化です。

そういう意味では、もう一つの特徴として大事なものは、機械化がどんどん進んで今はデジタル化。座っているだけで情報も取れるし、いろんなことができてしまう。そういう世の中だからこそ、人間らしさを保つには、スポーツ・音楽・芸術という、自分の手を、体を、本当に五感を通じてしかできないものが大事になる。それがすごく人間らしさの象徴にもなると思っています。

そして、国際メガスポーツイベントであるオリンピックが目指すものは、スポーツをすることは人権の一つであると。これがオリンピック憲章に書いてあるんですね。人権だと。人間に生まれたからにはスポーツを楽しむ権利がある。それが書かれている。しかも、いかなる差別も受けることなく、スポーツをする機会を与えられなければいけない。

つまり、競技の選手のことばかり私たちは目がいきますが（メディアもそこにいきます）、しかし最後の最後を目指しているのは、それによってみんながスポーツというものに関心を持って、人間のすばらしい文化としてみんなが楽しんでくれる、一生楽しんでくれる、そういう社会をつくって交流をして、交流したら、知っている人間を撃とうとは思いません。そうやって平和な社会をつくっていく。そこに最後の究極の目的があると思っています。ここに非常に感動しています。

さっき舂本先生から出ましたが、オリンピックも実はいろんな問題を抱えていて、それを何とか改革したいとあって、「オリンピック・アジェンダ2020：20+20」、40の提言というのをIOCが決めています。ここで言われているのがワールドゲームズ。私は今、その国際理事を担当していますが、私のフライングディスクもそこに入っています。今度、東京2020の5競技が追加されるかもしれない。あの競技は、全部ワールドゲームズから候補になっています。つまり、オリンピックに入っていないものを集める大会です。これはIOCが後援しています。そこもっと連携しましょう。

それからワールドマスターズゲームズ。私はきょう三つバッジをつけていますが、19年、20年、21年に関西広域で30歳以上の人なら参加費を払ってだれでも参加できる。5万人以上の選手募集をする、そういう大会もIOCの承認競技です。

そういうところとも連携をしながら、オリンピック競技だけではなくて幅広くスポーツを広めていこうと。しかも、そのアジェンダの中にはスポーツ入門プログラムのスポーツ・ラボ、一般市民が体験できる、そういうものも行いましょう。この近くの立川の昭和記念公園で3月12日、東京都が3年目になりますが3万人ぐらい集まってるいろんなスポーツを体験できる。飲み食いもあり、音楽もあり。まさにオリンピアの祭典のようなことを体験しようという企画を実際に始めています。

スポーツアコードという、皆さんには耳慣れない団体ですが、実は40カ国以上に広がっているスポーツだけが入れる連盟。そこには93のスポーツがあります。犬ぞり競技もあります。

皆さんのお手元にあるプリントで、先ほど申し上げたのは3番のところ。 「オリンピック・ムーブメントは、オリンピズムの価値に鼓舞された個人と団体による、協調のとれた組織的、普遍的、恒久的活動」、これがあつた上で4番目、さっき言った人権の一つで、「スポーツをする機会を与えられなければいけない」。そして6番目のところに、あらゆる差別をなくすということが書かれています。

そして、先ほど和田さんもちょっと触れられましたが、第57条にこんな規定があります。「IOCとOCOG（OCOGというのは大会組織委員会です）は、国ごとの世界ランキングを作成しては

ならない」というのを書いています。テレビで、この間のオリンピックではロシアが一番メダルを取っているとか、日本は韓国とか中国よりオリンピックのメダル数が負けているとか言っています。しかし国の争いではないと言っているわけです。だって、アメリカと小さなアフリカの国が競ったところで何の意味もないわけで、別に国の力を競うための大会ではなく、1位になった人が日本人で、日の丸を上げてくれて君が代を流してくれる。その個人を称えているのであって、国を称えているわけではないのです。

例えばJOCが今度のオリンピックでは30個以上メダルを取ろうと。これは自己目標で別に構わない。しかし、中国より多く取ろうとか韓国より多く取ろうというのは、目標ではない。そのために競技をしているわけではない。国力とか国威発揚ということだけの、それに利用されるオリンピックであってはならないということです。

先ほどベルリンオリンピックの話が出ましたが、ヒトラーは完全にプロパガンダとして使い、国威発揚のためのオリンピックを行い、ドイツ人はすばらしいというところを鼓舞する大会にしました。実は組織委員会の会長は政治家であってはならないという規定があります。森さんは首相を引退しているので問題ありません。政治の介入というのをことごとく排除しようというところも、オリンピック憲章には書かれています。

受験雑誌を見て愕然としました。上智大学は、1964年の東京オリンピックで成り上がった大学と。本当におっしゃるとおりです。私も実は上智大学の卒業生で、最初は歴史学を専攻していました。今、早慶上智とか、御三家と言われていますが、当時はただの一般大学で、ヤソ(教)の大学とか言われながら、競争率も決して高くない。

ところが、64年のときに実は活躍しました。なぜかというと、もともとイエズス会という、キリスト教を日本に伝えたカトリックの修道会の神父さんたちが教育奉仕でやってきてつくった大学ですから、68カ国以上の外国人がいて、ネイティブスピーカーでした。そういう人たちと普段から接することができて、23言語が習えて、その当時、LL教室を持っていたのは上智だけだったので、64年のオリンピックの通訳ガイド、そうしたボランティア要請を一手に引き受けて行いました。そのことによって、ああ、国際的な大学で語学ができる大学だと評判がよくなって、そこから急に偏差値も上がり、世の中もそういうグローバル化したことで職が増えて、うちの卒業生がいろんところで、まずは女子が活躍しました。それで男も採用してみたら役に立つのではないかといって評価が高まりました。御三家といっても早稲田、慶應にはもう大きく水をあけられています。国際的な大学と言われるようになったのは、1964年の東京大会との関わりが大きな要因です。

私も上智の卒業生ですが、決して英語は好きではありませんでしたし劣等生もいいところで

したけど、その国際というところに興味を持ってアメリカに武者修行に行ったことで、使わざるを得ない環境に行ったら通じたのがおもしろかった。今、いろんな国際会議の理事をやっていまして、いまだに英語は下手ですが、通じさせるということについてのテクニックというか、その魂というか、それを身につけることができました。

英語が得意な人、不得意な人、ほかの言葉ができる人できない人がいるでしょうが、いろんな外国人に触れるチャンスです。だから物おじせずにそういうところに、またいろんな国の人たちと絡んでいく。日本は、中国、韓国、アメリカ、イギリス、ドイツ、フランスみたいなどころばかりのつき合いが多いのですがオリンピックには200カ国ぐらいが来る。

皆さんも、上智大学も考えているんですが、それこそ事前合宿をやる国ばかりではないということです。事前合宿というのは任意でやることです。来られない国にみんなでポケットマネーを集めて、大学だったらいろんな施設があるので、本当に3人とか4人しか選手団がないような国を呼んで事前合宿を行う。いろんな意味で本当のおもてなしというものができる。特にパラリンピックの選手たちに機会をつくる。いろんなことができるのではないかと考えています。

先日、武蔵野大学の先生がゼミ生と一緒にパラリンピックをみんなで体験しようという企画を江東区で行いました。区長からJOCの人から組織委員会から一般市民からみんな来て、そこでパラリンピックの種目の選手も呼んでデモンストレーションを行い、一緒に、こういう競技かといって、スポーツのレパトリーを広げることにつながりました。パラリンピックのときにまた見に行こうという人がそこで増えたと思います。これはまさに一つのゼミが行ったことです。そんなことが実はできる。

杉並区の例です。ある人がいいアイデアを出しました。くじを引いて、ここはアメリカ通り、イギリス通り、フランス通り、商店街という商店街に全部200カ国の国旗をあげました。そうしたら、その国の人たちとか観光客が見に来てくれるかもしれない。そこに来る選手のパネルを貼ろう、いろんな文化の展示をしようと。実はこのオリパラというものはスポーツの祭典ではありますが、まさに文化・芸術、いろんなものが絡みながら人がたくさん来て、いろんな人たちが国際的な交流のできる場なので、そんなこともぜひ学生たちが考えてくれるとよいと思います。

私は教職員のいろんな人を巻き込みながら、スポーツだから体育の先生に任せるのではなく、いろんな人たちが絡んで行うことで、研究やボランティア活動、いろんなことを行っていますが、来年度から4科目一遍にオリパラ講座を開いちゃおうなんていうのを、今始めています。

それから、卒業生も実はいろんな経験をしていますよね。そういう人たちの人材バンクもつ

くりながら、いろんなことをいろんな形でやろうと。それから、ラグビーが日本の12カ所を回っていきますから、地域でまたそういう活動も一緒にやっっていこうと考えてます。

上智大学は、for others, with othersというのが教育理念です。まさにこれを具現化するのがオリビズムだと思います。それから日本に今いる留学生、外国人、ここの交流というのも広めていく。そんなことも一つ。あと、上智の施設をパブリックビューイングに使ってもらうことも検討していきます。

これは個人の意見ですけど、スポーツ・フォー・オール社会。日本でのスポーツというのは、学生のときにやめて社会人になるともう縁遠くなってしまう。そういう意味ではスポーツの正しい理解をして一生の文化にしてほしいというのが一つ。それから第三の開国で真のグローバル化をつくる。これは東京2020でぜひやってほしいことだと思います。

さて、私の父が実はプロの写真家で、東京オリンピックのときに実は8ミリというのが始まったのですが、まだビデオがない頃です。そのときにオリンピックを私たちも見ましたが、モノクロのテレビです。カラーなんて買えるのは、あの「ALWAYS 三丁目の夕日」にあったように、ほとんど金持ちの家にはしかなかった。そこでカラーでみんなに見せてやれということで、弟子20人とオリンピックを開会式から閉会式までずっと撮って、それを無料上映しました。

それが今、2020オリパラが実現しものすごく役に立っているのは、IOCのいろんなコピーライトの問題もあるのですが、この作品はアマチュアの映像だということもあって、実際に60を超える番組で取り扱っています。

恐らく皆さんの大半は64年のオリンピックを見たことがないと思いますので、時間の許す限り、5分ぐらいですが見てもらおうと思っています。

(映像上映)

すごいシンプルで、マスゲームだとかそんなものは全然なかった。

3分15秒のフィルムを買うのに5,000円した時代です。だから、すごく貴重だったのですが、今のビデオみたいにだらだら撮らないで、とにかく考えながら撮った。

これは、壊してしまったあの国立競技場です。実は戦前にも東京オリンピックをやろうという構想があったときに、駒沢に10万人のスタジアムをつくらうという、そんな構想もありましたが、最終的に64年はここに落ち着きました。

みんな足並み揃っているでしょう。今はもうオリンピックの入場行進はだらだらやるから時間がかかりますが、ちゃんと足並みが揃っています。

ここは国立競技場の外ですが、ここに入るにも整理券が必要だったそうです。

もうこれを見たときにびっくりしました。赤のジャケットなんて、その当時考えられない。国旗だよねと思いました。ど派手でした。

今の天皇のお父様です。昭和天皇です。

先ほど出た坂井義則さん、広島原爆が投下されたその日に広島で生まれた人です。

このトーチは、これも日本の技術で、酸素を燃料に入れ込んであって水の中へ入れても消えない。これもそのときのすごい技術で、今もこの技術は世界に受け継がれています。

この聖火台も川口の鋳物職人の親子二代が本当に失敗を繰り返しながら最終的につくった聖火台です。今、石巻に置いてあります。これを今度、新しいスタジアムに持ってくるかどうかということで、もめています。

色がうっすらついていましたね。

これだけです。入場行進をして、今のブルーインパルスが五輪の輪を描いたら退場して終わり。選手がヒーロー、ヒロインなのだという、そういう考えです。でも、今は商業主義になったので、いろんなショーを行いチケットを高く売らないと収入が上がらないという一面もあります。

柔道はヘーシンクに最後の無差別では負けましたが、もし全員日本人が金メダルを取っていたら、多分なくなっていました。事実、柔道は一回オリンピックから外れているときがあります。メキシコの大会のとき、外れています。

テコンドーも外されかかって残れたのは、いろんな人たちが勝てるような仕組みをつくったからで、一定の国しか勝てないというスポーツだったら外されていきます。

これ、今の甲州街道で、調布の味の素スタジアムのところを折り返しています。

アベベ選手ですが、前のローマの大会のとき、裸足でローマの石畳を走って優勝したので有名になって、また裸足で東京を走ってくれると期待していたら、このときは靴を履いていました。

それで、アベベ選手のこのフィルムが欲しいといって、ビデオがない時代ですから、これを8ミリにダビングして差し上げたら、エチオピアの博物館に今でも宝物で飾ってある。皆さんは、ビデオの感覚があるでしょうが、これNHKにも残っていません。メディアがないから残す手段がないので、本当に貴重なロールの中に、本当にわずかなものしか残っていない。あとは市川崑監督の公式記録映画しかありません。

こうして街頭テレビで初めてカラーの映像を見たりして、マラソンはモノクロでした。でも、このとき世界で初めての全区間中継が実現しました。航空自衛隊のヘリコプターが空中で止ま

って、それが中継点。ちょっとずれたらもう映像が映らないという、そんな離れわざをやったのけました。

この当時、主婦の正装はみんな割烹着なんですね。

これ、オリンピックのために道幅をものすごく広げました、倍近くに。

このとき小学校5年でしたが泣きました。私も戦争を知らない世代ですが、負けた日本の旗手をああやって担いで、海外の選手がもう入り乱れて。これは実は後で演出だということになったんですが、しかし、本当に世界の選手がこのハプニングで肩車をしてくれた。ああ、日本が国際社会に戻れた、認められたんだなということをすごく子供ながらに実感した、そんな大会でもありました。

だから、ビジュアル的に体感するんです、私たちは。一緒にこの感動というものを。世界という目で考える期間になるというのが、このオリンピックのすごいところだと思います。

というところで、ありがとうございました。

## 質疑応答

**司会** 短い時間ですけど、質問と意見を受けて、6時半過ぎぐらいには終わりたいと思っております。

**質問者1** 本日は貴重なご講演を誠にありがとうございました。経済学部2年のイシダと申します。

普段、大学生でもスポーツに携わるという機会がなかなか……。例えば体育連盟に所属している学生でないとスポーツにかかわる機会はなかなかなく、またこういう講演に参加しなければ、2020年のオリンピック・パラリンピックの理解がなかなか深まらないのかなと思うのですが。

あまりスポーツに携わらない学生でも、オリンピックやパラリンピックに対する意識が変わるきっかけになるにはどうしたらいいのでしょうか、よりスポーツにかかわっていくように、生活習慣化していくためにはどのようなことを私自身、アプローチしていくことが大事なのかということをお教えいただけたらと思います。お願いいたします。

**師岡** 難しい質問というか……。楽しいことはみんなやるんですよ。例えばあそこに新しい食べ物があって食べたことがないものだったらちょっと食べてみたいとか。だから、きょう申し上げたように200カ国が来るというのはすごいことで、日本って、インターネットでいろんな情報があるようでも、実は知らないこともいっぱいあるわけですよ。

そこで国境を越えられるというものと島境である日本での感覚の差もあるし、いろんなそういう違いを知ることから興味を持ってもらえばいい。

ことスポーツは、さっき申し上げたように

ものすごく幅広い。きょうは時間がなかったので93は挙げられませんでした。例えば日本の囲碁だって国際スポーツです。実はそういうものなんだという意識改革ができるという。

私たち教員も悪いのですが、日本の中で富国強兵の策として、教育の策として、スポーツというものがその教育ツールとして使われてきて、それだけの世界に閉じ込められてしまったことで、生涯教育という言葉をも嫌がって生涯学習になったように、楽しむために自分がするものだったらいいと思う。

また、スポーツは絶対にやらなきゃいけないものではない。義務ではないから、したくない人は別にしなくてもいいけれども、絶対にあなたも好きになるスポーツがあるはずだという、その文化をどうやってこれから広めていくかということだと思います。お答えになったかどうかわかりませんが。

**舛本** では少しだけ。

別にスポーツをするだけではなくて、見てもいいわけですね。関心を持つということには、それからボランティアで、役員とか取り巻きとして支えるということもできるわけです。だからスポーツを必ずするというふうには直結しないほうがきっといいのかもしれない。ただ関心を持ってそういうふうにかかわってみると、支えたり、見たり、まあ、やりたくなればやればいいだろうという。そういうようなつき合い方ができるんじゃないでしょうか。

これはオリンピックも同じだと思います。オリンピックを見に行ったりボランティアをしたり支えたり。そしてオリンピックというのはこういうものだったよという、自分たち



が2020年に体験したことを後に子供たちに伝えてあげる、後々の世代に伝える、こういうようなことが重要なことになるだろうと思います。だから、かかわり方はいろいろあるだろうと思います。

**和田** むちゃくちゃなことを言わせてください。一つは、体育と、美術というか図画工作、これを小学校から授業から無くせば良いのではないかと。そうすると体育嫌い、美術嫌いの子がいなくなるのではないかなと思っています。

もう一つ真面目な話で、私は64年のときは生まれていませんが、昨年だったか、一昨年だったか、文学者、作家がオリンピックをどう見たのかという本が、今、再版されました。これを見ると非常におもしろい。文学者は、もう自分はオリンピックとかかわり合いたくないから別荘へ行っただけで、でも、どうしてもテレビをつけて、気づいたら何かオリンピックに引き込まれていたとか。何かそのような、スポーツとかオリンピックに関心のない人も引き込む力がオリンピックにはあるのかなと。

私は別に全員がスポーツをやらなきゃいけないなんて思っていないんですけども、これをまだスポーツのおもしろさを知らない国の人に、何かこれがヒントとなって、どのように伝えていけばいいのかなという発想に、若い人がぜひなってほしいなと思っています。

**師岡** 都知事になる前の石原慎太郎さんが、64年の東京オリンピックのことを書いているんですよ。招致を成功させた立役者って、あの人が作家としてどう64年を見ていたかというのを見るのもおもしろいです。

**司会** ほかにいかがでしょうか。せっかくの機会ですから。

**質問者2** 文学部1年のキクチと申します。きょうはお話をありがとうございました。

私はスポーツには興味がある側の人間なので、オリンピックのときにも何かいろいろかわることができればいいと思っているので

すが、今オリンピックに向けて、多分いろんな人が動いていると思います。スポーツとか保健体育とか、あと経済分野の人とか政治分野の人以外でどういう分野の人がかかわっていますか。

**師岡** それは、例えば音楽もそうでしょう。ゆずの応援ソングだとか。人間の生活すべてで、さっき申し上げたように、食べ物も。スポーツ競技大会としてのオリンピック競技大会を中心としながら、人間の生活文化すべてがかかわる。それが国際的にかかわっているという見方が正しいと思っています。だから自分の得意分野で、自分のやりたい分野でこれを題材にしてかかわるということは、ありとあらゆることでできると思います。私はそうと思っています。

**舛本** 文学部とおっしゃったんですね。そうしたら、先ほどちょっと紹介しましたが、文化プログラムというのが、今年のリオの閉会式から始まります。4年間です。それにはいろんなプログラムが用意されるので、いろんなかかわり方ができると思います。別に芸術家でなければできないというわけではありません。中央大学で何か考えられること、あるいは大学祭でやるようなことも連携して、これは文化プログラムですよというふうにしてやることもできます。

それから、中央大学はどうされるか知りませんが、ボランティアセンターをつくる大学がこれから増えてくるでしょう。首都大学も、もうできました。学生さんたちがかわりやすい制度をつくるということなんですね。でも、大学でそういうものがなくても、東京都自体がもうそういうボランティア養成に入ってきてますので、ボランティアは競技だけではなくて、文化プログラムもボランティアが当然必要なんですね。あるいは開会式で何かやりたい、これもボランティアなんですね。だから考えればいろんなかかわり方ができます。

**和田** 私はクーベルタンの研究をしていて、

オリンピックの研究をしているわけじゃなかったんですけど、実は決まったので、こういうところに出てくる機会が増えました。

何を言いたいかといいますと、オリンピックは、だれもが専門家になれると思います。もうみんなオリンピックに、私はかかわっていますと。ですから、あなたも私たちが気づかないところでオリンピックとかかわっているんだというのをぜひ提案してほしいと思っています。それがクーベルタンの言う、彼には思いもつかなかったオリンピック・ムーブメントになるのではないかと。そういう発信を、若い学生さんの柔軟な発想から生み出してほしいなど期待しています。

**師岡** それこそ皆さん得意な Facebook, Twitter で、自分はこう思うとか、オリンピック反対でも何でもいいんです。そういうのを例えば英語にしてみても世界からどんな反応が返ってくるかとか、そういうことを投げかける。オリンピックというのはみんなが知っている文化、いろいろ誤解もあるけれども、その議論を一緒にやってみるとか、そんなことだって、またかかわっていくことになると思います。

**質問者 2** ありがとうございます。

**司会** あとお1人か2人ぐらい。もし、あれば。

**質問者 3** きょうは貴重な講演をありがとうございました。経済学部2年のミズハシと申します。

師岡先生に質問ですが、2020年のオリンピックがあることで海外からたくさんの方が来られて、私自身、海外の人とたくさん交流がしたいと思っていますが、やっぱりどうしても語学力、英語の問題が絶対に必要だと思います。今後、英語を身につけて海外の方と交流する、もっと言えば、仕事で活用していくぐらい英語を身につけられるようにするには、これからどういう努力をしていかなければならないのか。そのあたりについて、教えてい

ただければと思います。

**師岡** もう使わなきゃいけない状況に自分を追い込むことです。興味・関心のあることについては、例えば音楽がお好きかどうかかわらないですけども、外国のアーティストのものを、英語で口ずさんだりとかしませんか。意味がよくわからなくても、何かかっこいいなと思って歌ったり。

あなたがもしスポーツが好きだったらそのスポーツで、ここの中央大学にいる外国人の留学生とかそういう人たちと一緒にになって、ルールの話だ、戦略の話だという、もうその使う道具。私が言うてはいけないけど、文法なんかどうでもいいんですよ。もう単語さえ通じれば実は通じていく世界なので、中学校の文法さえわかっていたら、単語数が増えていけばいいだけです。あとは通じさせたいという、その気持ちですよね。海外に行っているサッカーの選手なんかみんな現地の言葉を覚えるのは、それを使わなかったら一緒にプレーができないからで、だから何か一緒に楽しいことを外国の人たちとやってみるといことですよ。

あとは、例えば自分の住んでいるまちのことを知ってもらいたかったら、それをどうやって伝えるかという努力をしてみる。別に語学の専門家になりたいわけじゃなくて、通じることが大事なことなんだから、通じさせたい何かを持っていることが一番大事なことですよ。ただ普通にというのは難しいから、何か一緒に料理をつくってみる、どこかに一緒に旅行に行ってみる、何でもいからそういう外国の人たちと一緒に何かをやってみる。あとはそういう来た人たちのお世話をしてみるとか。まずは中央大学の中にどれだけ留学生がいるか知りませんが、その人たちと触れ合うサークルをつくるとかいうのも一つですよ。

一昨日の新聞に載っていましたが、南山大学という名古屋にある大学が英語部屋

というのをつくって、そこにいったん入ったら、もう英語しか使っちゃいけない。逆に日本語部屋というのがあって、そこに入ったら外国人の留学生も日本語しか使っちゃいけない。そういう空間をつくることによって慣れていくというのを行っていましたが、そういうのも一つの例です。

まあ、とにかく楽しみを共有するようなどころから始められたらいいんじゃないかなと思います。

**司会** 最後にもう1人。よろしくをお願いします。

**質問者4** 貴重な講演をありがとうございます。法学部1年のマスダです。

オリンピックにはさまざまなメリットがあって、例えば平和への道のりでしたり、あとは国民への教育だったと思いますが、ここで少し疑問に思います。今日聞いていて、インターナショナルな外向きの交流のメリットが強く出ていると思いました。個人としては、オリンピックにはその国で行われる国民の団結力のアップだとか国威高揚、そういった面があると思ったのですが、今の時代となってはそういった側面というのは前時代的なものということでしょうか。そういうことを疑問に思います。

**舛本** ロンドンのときにも言われていたことですが、レガシーという言葉がよく使われます。その中でロンドンが確実に成果として上げたレガシーにプライドがあります。自分たちはオリンピック、スポーツの母国・イギリスとして、あるいはパラリンピックの母国・ロンドンとしてきちんとやれた、開催することができた。そういう思いがイギリスの人たちのプライドをしっかりと守る。こういうことになったと言われている。

別に東京2020年が世界向けだけでやっているとは思いません。逆に、内向きになり過ぎているのではないかと、もっと平和とか世界のことを大切にしてほしいし、すべきだと。き

ようはこういうような発言をさせていただいていますが、まさに国威発揚、こういうものは64年の日本もしましたし、88年のソウルもしました。2008年の北京もそうでした。世界に追いつき追い越せ。それは師岡先生がおっしゃったエチケット、マナーもそうです。オリンピック国民運動というものを展開して、世界標準に何とか追いつこうとしたのが64年の東京だった。そういう形で64年に開催できたという自信とともに、日本は世界の国々に伍して、経済的にも自信を持って戦える国になったという歴史はあったわけです。

ただ、そういう面ばかりを2020年に考えていいのだろうか。こういう国威発揚型のオリンピックからもう少し成熟した人間型の、成熟都市・東京と言うからには成熟した人間の目指したようなオリンピックになってもいいだろうと。その中にナショナル・プライドが入るのは別に私は構わないと思いますが、ナショナリズムになってはいけない。トランスナショナルでパトリオティック、愛国主義的なメッセージはあってもいいが、ナショナリズムにならないようにしてほしいということも補足しておきます。

**師岡** 物事はなんでもそうですけれども、功と罪があって、いいことばかりではない。きょうはいいことばかり言っているけれども、実はオリンピックによって負の遺産的なことが残ってしまう可能性もあるし、こんなお金を使ってということは、今問題になっているわけです。

だから、私も実は東京にオリンピックが来るのは賛成派ではなくて、イスタンブールが初めてのイスラム圏でのオリンピックになるので、そのほうが世界のためになるのではないかと考えていました。しかし、決まった。決まったからにはここから返すよりは、これを徹底的にプラスに生かす方向を目指せばいい。だから、その中でプラスを得るとしたら何なのか。マイナスも出てくるかもし

れないけれどもそれを最小限にして、プラスを何にするべきかと。

これを考えなければいけないのは、皆さんの世代です。まさに4年半後にもう社会人になって、そのときにこれからの日本をどうするか。このオリンピックを開催することでそれを乗り越える何かがある。あるいは、世界的にこれだけ高齢化した日本がやったオリンピックが、その後の世界にいい影響を及ぼしたとか、何かそういうプラスにするにはどうしたらいいかというのを、今から一緒に考えていくというのが大事なことだと思っています。

**和田** きょうの文学部で話をしたんですけども、ヨーロッパは古代オリンピックが終わってからもずっと古代オリンピックの知識はありました。ところが、日本はオリンピックという知識が入ってきたのは明治になってからです。つまり、日本はオリンピックを知らない国だった。今、日本は4回目のオリンピックを開こうとしている。全く知らなかった国が4回目のオリンピックを開く。これは単に、初めてオリンピックをやるというより、もっと大人の、余裕のあるオリンピックへの活動をしなければいけないのではないかなということが一つあります。

それから、スポーツという興奮しやすいんですね。クーベルタンもそれは非常に言っていて、だからこそ芸術的な、ここは冷静に自分を見つめるという姿勢が必要だということを行っています。どうしても国威、ナショナリズムの輪の中に陥りやすい。だからこそ、少しインターナショナル的な立場から物を言う機会が非常に大切なのではないかなと思います。

4回目でも余裕があると、第2次大戦の敗者の痛みがわかる国、オリンピックを知らなかった国だからこそ、オリンピックとまだまだ縁のない国のことを考えて活動できる。これを若い人を中心に考えていけば、非常にいい

オリンピックになるのではないかと。

**舛本** 最後に、クーベルタンがモットーとしたことは、look far, speak frankly, act firmlyという言葉です。今、英語で言いましたけれども、和田先生がおっしゃる、俯瞰的に遠くまで見据えてしっかり考えてほしい。そしてお互い一人で考えるのではなくて、仲間で一生懸命、気楽に、気さくに話し合っているんなアイデアを出して、決まったらact firmly, しっかり確固として、断固として行動しようということです。

まあ、2020年に向けてそういう途上にあってほしいなと思いますし、若い皆さんと一緒に進めていけたらなと思っています。

以上です。

**司会** ありがとうございます。

中央大学としてはこれが第1回で、ファーストステップというか、そういうところに位置づけをしていますので、これからできるだけたくさん実施していきたいと思っています。学生諸君にもぜひご意見を出してほしいと思います。

半分ぐらいしかきょうの紹介はできませんが、2月の第1週か第2週に、ホームページのトップページにあるChuo Onlineというところのオピニオンに、きょうの話を私が少し紹介させていただきますので、ぜひまたそれを読んでいただいているような意見を出していただければと思っています。よろしく願います。

きょうは本当にお忙しい中、来ていただきました3人の先生方に、最後に拍手をもってお礼を言いたいと思います。ありがとうございました。

あとはフロアの方も本当にありがとうございました。

長時間にわたり、ありがとうございました。